〈PR〉 AGRI PROFESSIONAL

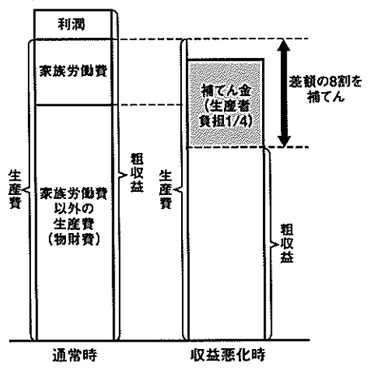
肉用牛肥育経営安定特別対策事業について

独立行政法人農畜産業振興機構が補助する「肉用牛肥育経営安定特別対策事業」（新マルキン事業）は、生産者と当機構の拠出により基金を設置し、四半期の肥育牛1頭当たりの平均粗収益が平均生産費を下回った場合、生産者の方々に、その差額の8割を基金から補てんする制度です。原資は、生産者と当機構が1:3の割合で積み立てています。

補てん金は、四半期ごと肉専用種、交雑種、乳用種の品種ごとに、販売頭数に応じて交付します。

当機構は、新マルキン事業を通じて、肉用牛肥育経営の安定化に貢献できるよう、さらなる行政サービスの向上に努めます。

経営基盤の安定・強化の一助として、新マルキン事業をご活用ください。



お問い合わせ先 畜産振興部畜産振興第三課 TEL03-3583-8639

詳しくは、当機構のホームページをご覧になるか、お気軽にお問い合わせください。

ホームページ http://www.alic.go.jp

alic 独立行政法人 農畜産業振興機構

▼農業プロフェッショナル VOL.2（全4回） 肉牛

麦芽糖化粕、きめ細かい飼養管理の交雑銘柄

肉牛

山梨県 小沢豊さん

ビールやウイスキーの蒸留粕（麦芽糖化粕）を活用し、黒毛和種（和牛）に引けを取らない肉質の良さから銘柄の確立を進めている山梨県の交雑種（交雑）「甲州麦芽ビーフ」。韮崎市の肉牛肥育農家、小沢豊さん（59）＝写真＝は出荷する交雑の4～5割が、社日本食肉格付協会の肉質等級で3等級以上。さらなる品質向上をめざし、産地の生産者をリードしている。

牛肉消費のすそ野広げる

同県の肉牛の銘柄化は平成元年、「甲州牛」が商標登録されたのを機に研究会が発足し、現在42戸が和牛と交雑種の計約2100頭を飼養。約1100頭を出荷販売する。和牛は4等級以上を「甲州牛」、3等級以下を「甲州産和牛」として販売。近年いずれも販売数量が横ばいの中で、右肩上がりなのが「甲州麦芽ビーフ」だ。手ごろな価格とやわらかくジューシーな肉質が好評価を得て、販売実績は増加しており、平成20年度616頭は銘柄発足当初の1・4倍。牛肉消費のすそ野を広げる重要な役割を果たす。

飼料の食い込み良く、増体量向上

研究会会長の小沢さんは和牛約60頭、交雑約50頭を飼う。麦芽糖化粕を活用した飼料給与の工夫ときめ細やかな個体観察に力を注ぐ。麦芽糖化粕は近郊の大手酒類メーカーの工場から出た副産物を加工する地元企業から入手。24カ月齢で出荷するまでの間、配合飼料に麦芽糖化粕を混ぜて与える。

これにより、牛の胃の調子が良くなり、飼料の食い込みが良くなって増体量が向上し、肉質に好影響。

また粗飼料は、堆肥（たいひ）と交換で近隣の農家から稲わらをもらいほぼ100％自給。「牛に無理をさせない」ことに細心の注意を払い、飼料の食い込みなど、牛の微妙な変化も見逃さないよう1日数回、牛舎を巡回する。地域内で資源を循環させながら、きめ細かい飼養管理で肉質等級の向上に取り組んでいる。

新マルキンで「経営続けられる」

そんな小沢さんの経営の下支えは、独立行政法人農畜産業振興機構が補助する「肉用牛肥育経営安定特別対策事業」（今年度から新マルキン事業として仕組みがシンプルでわかりやすくなった）。四半期ごとの肥育牛1頭当たりの全国平均粗収益が平均生産費を下回った場合、その差額の8割を補てんする。直近の7～9月期まで9四半期連続、全品種で補てん金が交付されている。「最近の円高にもかかわらず、原料を海外に頼る配合飼料価格は安くない。この事業があるからこそ経営を続けられる」と小沢さんは語る。

小沢さんは今後、県内消費をさらに伸ばすため、販促活動にも一層力を入れる。県土の8割近くが山林の同県。特産のフルーツに並び、富士山を望む「清流の地で育まれた牛」として、地域の特色を活かした物語性のあるPRも考えている。